



巻頭言

著者	二階堂 善弘
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	14
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022974

巻 頭 言

関西大学東アジア文化研究科紀要『東アジア文化交渉研究』の第14号をお届けする。本号は内田慶市教授の古稀記念号となっている。

内田教授は、1951年福井の生まれで、1973年に福井大学をご卒業後、大阪市立大学の大学院を修了された。78年より福井大学の教員として過ごされ、90年に本学に着任された。98年には米国ハーバード大学で研修を行われた。2012年には第23代図書館長に就任された。博士（文学）と博士（文化交渉学）の2つの学位を有しておられる。そして本学の文学部、文学研究科、外国語学部、東アジア文化研究科在任中には数多くの学生を育て、卒業生や修了生は各界で活躍する人材となっている。

これまで内田教授は中国語文法、言語理論、中国語史、中国語教育など多くの分野で優れた業績を挙げられ、関連学会ではその名を知らぬ者はないと思われる。特に、「西学東漸」すなわち近代における東西言語接触の研究では余人の追従を許さぬほど、多大な業績を挙げておられる。また東アジア文化研究科の提唱する「文化交渉学」においては、その理論と実践の両面で活動され、支えてこられた。特に「周縁からのアプローチ」の手法を用い、優れた業績を示されたことは大きい。

そして2007年度から11年度までの文部科学省グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」、2011年度から2015年度までの私立大学戦略的研究拠点形成支援事業「東アジア文化資料のアーカイヴズ構築と活用法の研究拠点形成」、そして2018年度から開始された私立大学研究ブランディング事業「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」など、数々のプロジェクトで重要な役割を果たされている。特に、「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」では関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）のセンター長に就任され、多大な業績を挙げてこられた。

これらとはまた別に、内田教授の大きな業績として挙げられるのが、「人文学におけるコンピュータ利用」である。90年代、パーソナルコンピュータが発展し、それまでの手法を大きく変化させていくことが国内外にて活発になっていった。

しかし当時のコンピュータはまだ非力で、日本語OSの上で中国語を扱うことすら十分ではなかった。初歩の簡体字を打つことすら難しかったのである。そのために、コンピュータ上で中国語研究や中国古典研究を進めるには困難があり、また、進める人材も不足していた。

その困難な時期である1996年に『マックで中国語』（共著・ひつじ書房）が刊行され、この書籍は学界のみならず、編集や印刷業界にまで影響を及ぼすこととなった。当時の人文学の学界では、コンピュータ利用に懐疑的な声も大きかったが、内田教授はデータベースやコーパスの構築を先頭に立って行い、実績をもって反対の

声を覆し、リードするに至った。その功績は非常に大きい。そして、現在のようにコンピュータが広く応用される時代を、すでに早くから見極めていたことについて、その先見の明を賞すべきであろう。

筆者も当然に、『マックで中国語』を発売直後に購入した世代である。ただ残念ながら当時はアップル社のマッキントッシュのマシンはかなり高価で、なかなか購入して試すことが難しかった。筆者もまた人文学へのコンピュータ利用を主張した者のひとりではあるが、Windows系のマシンに限られた活動となった。ただ、早くから内田教授とともに人文学のコンピュータ利用の実践に参画できたことは光栄であると考えている。

今後とも、内田教授の多くの分野においてのご活躍を願う次第である。

2021年3月

関西大学大学院東アジア文化副研究科長

二階堂 善 弘